研　究

入院中の学童のケアに関する母親の認識と自立の考え

山田　晃子[1)]，藤原千恵子[2)]

〔論文要旨〕

入院中の学童の母親93名を対象に，入院中の子どもの自立や養育に対する母親の考えを明らかにし，ケアの実施者に関する母親の認識との関係を分析することを目的に質問紙調査を実施した。その結果，入院中の子どものケアに関して母親は，入院してもできることは子ども自身が行うことを望む傾向にあった。また，入院中の子どもの自立や養育の考えは，ケアの実施者に対する母親の認識に影響していた。母親と協力して入院中の子どもの成長を支えるために，看護師は入院中の子どもの自立や養育に対する母親の考えも理解したうえで援助することが重要である。

Key words：学童期，自立，入院中のケア，母親の認識

Ⅰ．はじめに

学童期の子ども（以下，学童とする）は，日常生活習慣を確立し自立に向かう時期にある。このため親は，子どもが成長するにつれて，子ども自身でケアを適切に行えるように，子どもへの関わりを見守る，確認する方向に変化させていかなければならない[1,2)]。一方で子どもが入院した場合，子どもの生活に看護師が加わり，子どものケアは，主に子ども自身，家族，看護師が行うことになる。また1990年頃から，入院中の子どものケアに家族が参加する重要性が強調されてきた[3)]。しかし，子どもに付き添う家族は，看護師は自分たちが期待しているほどに子どもの世話をしてくれないと受け止める傾向にあると報告されている[4,5)]。このような家族の受け止めは，家族の看護師に対する不満やストレス，遠慮に結びつき，看護師と子どもや家族との関係にも影響を及ぼすと考えられる。

入院中の子どものケアについては，子どもの年齢，病状，安静度の違い，付き添いの有無などによる違いを分析した研究が報告されている[6,7)]。学童の場合，日常生活面での自立を発達課題としている。しかし，ケアを学童自身がどのように実施するかは，母親の考えが大きく影響するため，まず母親の自立や養育に対する考えを明らかにし，母親が子どものケアを誰が主体的にすべきと考えているかとの関係について，検討する必要があると考える。入院中の子どものしつけや養育に対する考えは，これまでにも報告されているが[8,9)]，入院中の学童を対象にして，特に自立に焦点を当てた母親の養育に対する考えを調査した研究，さらにケアの実施者に関する母親の認識との関係を分析した研究は行われていない。

そこで本研究では，入院中の学童に対する看護師のケアのあり方を考えるため，入院中の子どもの自立や養育に対する母親の考えを明らかにし，ケアの実施者

Perceptions of School-going Children's Mothers with Regard to Independence and Care of Their Children in Hospitals

Akiko YAMADA，Chieko FUJIWARA
1）奈良県立医科大学医学部看護学科（看護師/研究職）
2）大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻（看護師/研究職）
別刷請求先：山田晃子　奈良県立医科大学医学部看護学科　〒634-8521 奈良県橿原市四条町840番地
Tel：0744-22-3051　Fax：0744-25-7657

〔2295〕
受付 10.11.15
採用 12. 3. 7

Presented by Medical*Online

に関する母親の認識との関係を分析することを目的とした。ただし，母親の認識には，子どもの病状などが影響すると考えられたため，学童の病状，安静度を一定条件に揃えた。

Ⅱ．研究方法

1．研究対象

全国の小児科がある300床以上の一般病院と小児専門病院の中から無作為に抽出した306施設のうち，研究協力の得られた32施設に入院する学童の母親258名。ただし，対象となる子どもは，①小学校1～6年生，②病状が比較的安定，③入院前のADLが自立し，調査当日は，トイレだけでもベッドから降りることができるという3条件を満たすこととした。

2．調査期間

調査は，2009年6月上旬～同年9月30日に実施した。

3．調査方法

プレテストは，研究対象者と同じ条件を満たす母親3名と小児が入院する病棟の看護師に実施し，その結果を参考にして質問項目の内容，表現を修正した。

調査は，無記名，自記式郵送調査とした。研究協力を得た病院の看護部を通して，病棟の看護師長による調査票の配付を依頼した。調査票の回収は，調査対象者が調査票を記入後，回答者自身で大学宛へ郵送する方法とした。

4．調査内容

ⅰ）背景情報

入院している子どもの年齢，入院期間，病状，ギプス・点滴など身体活動を制限するものの有無，入院している子どもの母親の年齢，付き添いの有無である。

ⅱ）入院中の学童の自立や養育に対する母親の考え

入院中の学童の自立や養育に対する母親の考えを把握するために，文献[8~12]を参考にして独自に，8項目を作成した。

8項目は，**表1**のような「衣服の着脱歯磨き等家でできていたことは，入院中でもできることは子ども自身がすべき」などの子どもの自立促進傾向を把握する3項目，「私が言わなければ，子どもはできることでも何もやらない」などの子どもへの干渉傾向を把握する4項目，「入院中の子どもに対して，不憫な思いがある」の養育に影響する母親の感情1項目で構成した。回答は「全くそう思う」から「全くそう思わない」までの4段階で求めたが，分析は「全くそう思う」，「まあそう思う」を「思う」，「あまりそう思わない」，「全くそう思わない」を「思わない」の2分類で行った。

表1 入院している子どもの母親の自立や養育に対する考え

自立や養育に対する考えの内容	思う		思わない		NA	
	n	%	n	%	n	%
子どもの自立促進傾向						
衣服の着脱歯磨き等家でできていたことは，入院中でもできることは子ども自身がすべき	66	82.5	13	16.3	1	1.3
子どもの病状や安静度から，子どものできることとできないことを見極め，できないことのみ援助している	71	88.8	9	11.3		
子どもが自分でやり遂げるようになるべく手を出さないで見守るようにしている	66	82.5	13	16.3	1	1.3
子どもへの干渉傾向						
私が言わなければ，子どもはできることでも何もやらない	20	25.0	60	75.0		
子どものためと思っていろいろしてあげることは，何もしないより子どものためになっている	43	53.8	37	46.3		
洗面，食事の世話，しつけは私の役割	73	91.5	6	7.5	1	1.3
子どもが自分で何でもしてしまうと，何か物足りなく感じてしまう	3	3.8	77	96.3		
養育に影響する母親の感情						
入院中の子どもに対して，不憫な思いがある	39	48.8	38	47.5	3	3.8

Presented by Medical*Online

ⅲ）入院している学童の日常生活のケア

入院中の学童の日常生活に必要と考えられるケアの内容は，先行研究[6,7]を参考にして表2に示される36項目を独自に作成した。さらに日本看護科学学会による看護行為用語分類[13]を参考に，それぞれのケアの性質，内容に基づいて『基本的日常生活習慣のケア』，『行動へ働きかけて行うケア』，『環境へ働きかけて行うケア』，『観察，医療処置の実施・管理』の4つに整理し分類した。

この36項目に関して，入院中の学童のケアの実施者（以下，ケアの実施者）を母親は誰であると認識しているのかを，「子ども自身」，「家族」，「看護師」，「必要ない」の4項目から1つだけを選択して回答をしてもらった。

本論文では，36項目のうち，『基本的日常生活習慣のケア』，『環境へ働きかけて行うケア』の2分類について主に述べることとした。それは，『基本的日常生活習慣のケア』が，日常生活を営むために必要な基本的な生活行動で，学童の身の回りに関するものであり，『環境へ働きかけて行うケア』は，学童の身の回りから一歩進んで，学童の周囲の環境へ働きかけるものであると考えたからである。

5．分析方法

統計的解析には，SPSSver11.5を用いた。母親の養育や自立に対する考えの違いによる，母親が認識するケアの実施者の違いをχ^2検定にて分析した。

6．倫理的配慮

調査対象者に対しては，調査票に研究目的，調査協力は自由意思であること，個人のプライバシーの保護，個人や病院が特定されることはないこと，調査目的以外には使用しないことを明記した。調査への同意は，調査票の返送によって得たものと判断した。なお本研究は大学保健学倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ．結　　果

調査票は，93名から回収された（回収率36.0％）。このうち調査対象者にあてはまらない祖母，両親祖父母以外の者，学童自身が回答した調査票，中学生の親が回答した調査票，未記入が多い調査票を除外し，母親80名を分析対象とした。

1．対象者の背景（表3）

子どもの年齢の中央値は，8（6～12）歳，子どもの入院期間の中央値は，7（1～700）日であった。子どもの持つ疾患は，腎・泌尿器科疾患，感染症，血液・腫瘍性疾患などさまざまであった。入院期間については，2005年9月厚生労働省「患者調査」で0～14歳の場合，退院患者の平均在院日数が9.4日[14]であったため，9日以内の入院と10日以上の入院に分類したところ，9日以内の入院の方が多かった。母親の年齢の中央値は，38（26～51）歳であり，付き添っている家族の方が多かった。

表2　日常生活ケアの分類

基本的日常生活習慣のケア	食事前の手洗い	環境へ働きかけて行うケア	排泄後の便器・尿器の片付け
	箸，お茶などの食事前準備		電気を消す等眠るための準備
	食事トレー，箸などの片付け		日常生活での困りごとに気づく
	排泄後の手洗い		部屋の風通し明るさ，室温の調整
	食事後の歯磨き		ベッド上と周囲の片付け，整頓
	朝，起きて洗顔		シーツ交換
	体を拭く（準備，更衣，片付け含む）		持ち物をなくさないように管理
	入浴（準備，更衣，片付け含む）		
	洗髪（準備，髪の乾燥，片付け含む）		
行動へ働きかけて行うケア	食事が楽しく進むような工夫	観察，医療処置の実施・管理	食事量，飲水量を用紙に記録
	消灯時間に，速やかな入眠		排泄回数を用紙に記録
	トイレへの安全な移動		尿・便を検査容器に採取
	室温に合わせた衣服の調節		便・尿の性状の観察
	転倒，ケガの原因となる行動防止		薬を決められた時間に飲む
	一日の計画立案		薬を飲みやすいように工夫
	立てた計画時間を守って行動		点滴ルートの抜け，外れないよう注意
	学校の宿題などすすんで勉強		氷枕を交換する時期に気づく
	他の子どもとの交流		体温の測定
	病気の状態に応じた遊び		体に起こっている異常に気づく

Presented by Medical*Online

2．母親の自立や養育に対する考え（表1）

「洗面，食事の世話，しつけは私の役割」，「衣服の着脱歯磨き等，家でできていたことは，入院中でもできることは子ども自身がすべき」，「子どもの病状や安静度から，子どものできることとできないことを見極め，できないことのみ援助している」では，80%以上の母親が思うと回答していた。また「子どもが自分で何でもしてしまうと，何か物足りなく感じてしまう」と思うと回答した母親は，3.8%と少なかった。

表3 対象者の背景

分類項目		母親 人数	母親 %
ギプス，点滴等体の動きを制限するものの有無	あり	49	61.3
	なし	30	37.5
	NA	1	1.3
入院日数	9日以内	47	58.8
	10日以上	31	38.8
	NA	2	2.5
付き添いの有無	あり	56	70.0
	なし	24	30.0

3．母親が認識する入院中の学童の「ケアの実施者」

i）「ケアの実施者」（図1）

入院中の学童の日常生活における「ケアの実施者」は，図1の通りに示された。『基本的日常生活習慣のケア』では，手洗い，食事後の歯磨き，朝起きて洗顔などの清潔ケアは，子ども自身を「ケアの実施者」とした割合が高かった。『環境へ働きかけて行うケア』では，家族とした割合が多かった。持ち物をなくさないように管理では，看護師を「ケアの実施者」とした回答は，全くなかった。

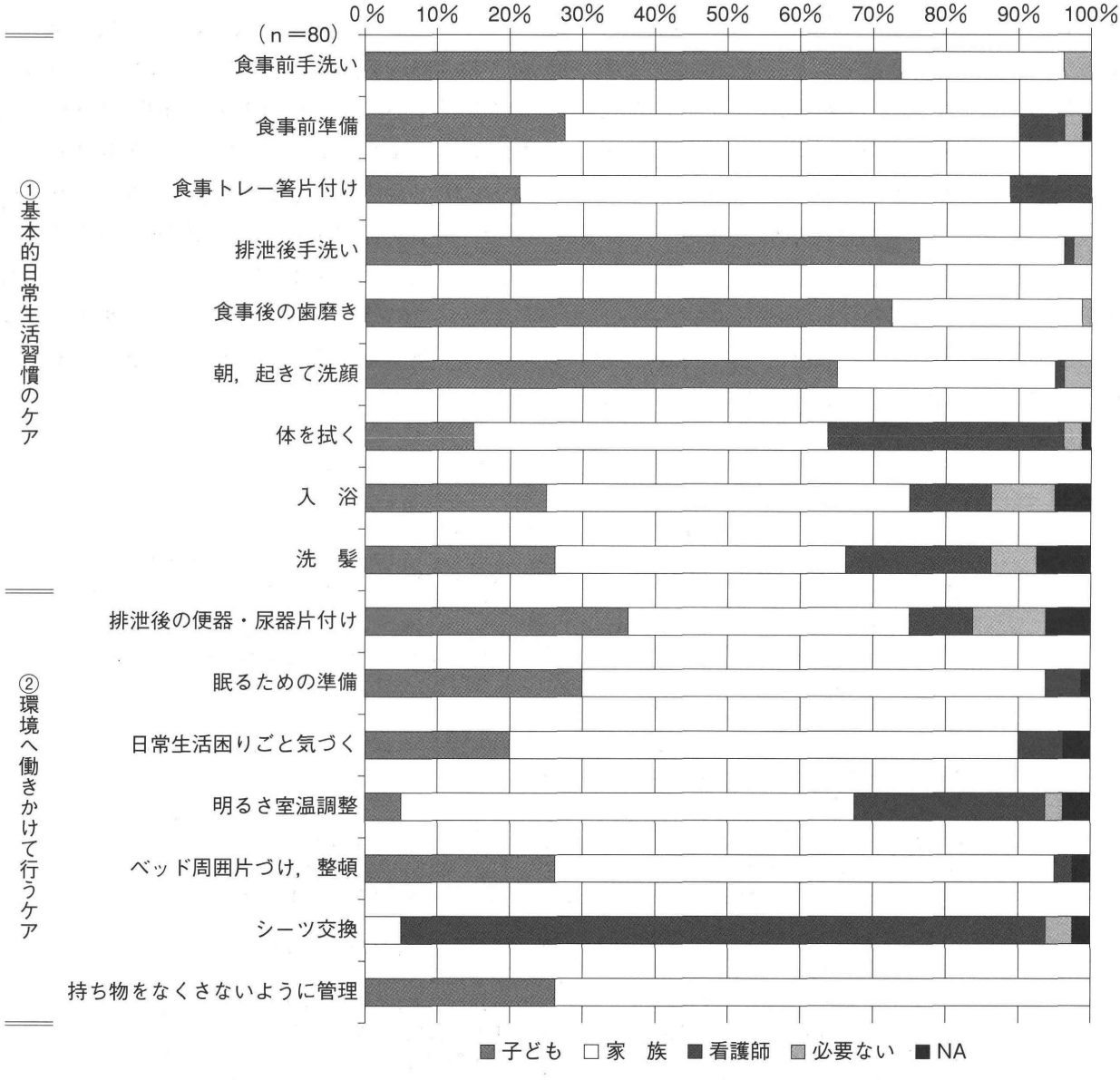

図1　母親が認識する「ケアの実施者」

Presented by Medical*Online

ii）自立や養育に対する考えと「ケアの実施者」との関係（表4）

入院中の学童のケアについて必要ないと回答したものと無回答を除外し，子ども自身，家族，看護師と答えた回答のみを分析対象とした。自立や養育に対する考え8項目のうち4項目に有意差が認められた。「衣服の着脱歯磨き等，家でできていたことは，入院中でもできることは子ども自身がすべき」，「子どもが自分でやり遂げるようになるべく手を出さないで見守るようにしている」と思う母親は，思わない母親に比べて，子ども自身を「ケアの実施者」とした割合が高かった。「入院中の子どもに対して，不憫な思いがある」，「洗面，食事の世話，しつけは私の役割」と思う場合は，家族とした割合が高かった。

Ⅳ．考　　察

1．入院している学童に対する母親の自立や養育に対する考え

母親は，入院していても，子どもができることは子ども自身で行うことを望む傾向にあった。Benesse教育研究開発センターの調査によると，学童を持つ母親は，子育てにおいて子どもが自分でするようにしつけていることを心がけており[15]，本研究の結果と同じ傾向を示している。これより，入院の如何にかかわらず，母親は子どものしつけに関して同じような考えを持っていると判断できる。

子どもは，学童期になると，学校や同年代の仲間のグループが大切になり，生活の中心もそれまでの家庭から友人仲間へと進み，徐々に親の手を離れていく[16]。本研究の対象児は，病状が安定しており，しかも親の手を離れ自立に向かう時期にある。このことから，入院中であっても，子ども自身で実施するように働きかけることは，入院前の日常を維持し，これまで築いてきた成長や発達を止めることなく支えていきたいという母親の気持ちが表れているものと考える。

また小栗は，母親は，入院中から子どもの学業など退院後の問題を気にかけていると述べている[8]。退院後の日常生活に戻った時に子どもが戸惑うことがないようにするためにも，母親は，入院中も，これまでの日常を維持したいという思いを強める傾向にあると考えられる。

一方でてんかん児をもつ母親や，子どもの病気が長期にわたりかつ重症である場合，親は子どもに対して溺愛的，過保護になる傾向が示されており，本研究の結果と異なる[17,18]。本研究は，入院前のADLが自立し病状も安定している学童を対象としており，入院期間も短い場合が多く，この2つの研究とは対象が異なる。これより，子どもの病状や入院期間の違いは，母親の考えに影響を与えていると推測される。

2．母親の自立や養育に対する考えと学童の「ケアの実施者」との関係

自立や養育に対する考えと主な「ケアの実施者」との関係では，ケアを子ども自身かそれとも家族あるいは看護師が実施するのかに注目し分析した結果，母親の自立や養育に対する考えの違いにより，「ケアの実施者」に相違が認められた。

「入院中でもできることは子ども自身がすべき」，「子どもが自分でやり遂げるようになるべく手を出さないで見守っている」のように，子どもが自立した方がよ

表4　自立や養育に対する母親の考えと「ケアの実施者」との関係　　人数（%）

自立や養育の考え		ケア項目		ケアの実施者 n	子ども	家　族	看護師	χ^2値
衣服の着脱歯磨き等家でできていたことは，入院中でもできることは子ども自身がすべき	①	食事後の歯磨き	思う	65	53(81.5)	12(18.5)		(Fisher)**
			思わない	13	5(38.5)	8(61.5)		
子どもが自分でやり遂げるようになるべく手を出さないで見守っているようにしている	①	食事前の手洗い	思う	64	53(82.8)	11(17.2)		(Fisher)**
			思わない	12	5(41.7)	7(58.3)		
入院中の子どもに対して，不憫な思いがある	②	持ち物をなくさないように管理	思う	39	5(12.8)	34(87.2)		*
			思わない	38	15(39.5)	23(60.5)		
洗面，食事の世話，しつけは私の役割			思う	73	17(23.3)	56(76.7)		(Fisher)*
			思わない	6	4(66.7)	2(33.3)		

①は日常生活ケアの分類（表2）のうち基本的日常生活習慣のケア，②は環境へ働きかけて行うケアを意味する
有意差のある項目のみ記載　*$p<0.05$　**$p<0.01$

Presented by Medical*Online

いと考える母親は，子ども自身の割合が高かった。有意差のあった食事後の歯磨き，食事前の手洗いは，低学年でほぼ自立してできる，入院前から子どもが実施してきた当たり前の生活行動である。入院しても今まで通りの日常を維持したいと思う母親からすると，入院中も子どもが当然自分でするべきと認識していると推測される。

一方で「子どもに対して，不憫な思いがある」や，「洗面，食事の世話，しつけは私の役割」と考える母親は，子ども以外つまり家族が実施するものと認識していた。特に，持ち物をなくさないように管理するという，日常生活習慣より一歩進んだ周囲の環境に働きかける内容で，有意差は認められた。これは家族が，子どもが一人で実施するのにはまだ無理があると考え，家族が代わりに世話をしていると考えられる。また，持ち物は子どもと家族にとってよりプライバシーに関わる内容であることから，持ち物の管理に関して母親は，看護師ではなく子どもと家族の身内だけで行っていると認識していると考える。

3．入院中の子どもと母親に対する支援

母親は，入院している子どもに対して，子どもができることは，子ども自身で実施することを心掛けていたことから，これまでの日常を維持しようとの気持ちが強いことが推測される。これより，看護師は，母親と子どもにとって入院が非日常的な出来事であることを認識し，子どもの自立や養育に対する母親の考えや子どもへの思いや願いを理解することが，重要である。その思いを理解したうえで，看護師は，母親と協力して，同じ方針で子どもに関わることが大切である。

また，子どもの成長を支え，子どもが退院後の生活に困らないようにするためにも，子どもの状況に応じで子ども自身が行うように，積極的に関わることが大切である。

しかしながら，入院中の子どもの成長発達を支え自立を促す大切さを認識していても，母親が子どもを甘やかし過保護にすることに戸惑いや違和感を持ち，母親と子どもへの対応に困難を感じた経験をもつ看護師は多い。ところが病状が安定しているという制約はあるものの，本研究では，母親の自立に対する考えが明らかにされ，看護師の経験から母親は甘やかし過保護にする傾向にあるとした調査前の予測とは異なっていた。このことは，母親と看護師の子どもへの願いは，同じ方向を向いているのにもかかわらず，母親と看護師が相互の考えを共有できていないことが推測される。本研究は，母親と看護師がお互いに子どもの自立や養育に関して，どのように意見交換をしているかまでは調査していないが，母親と看護師が子どもの自立や養育について話し合い，意見を交換する機会を設けていくことの必要性が示唆された。

また本研究は，回収率が低く，分析した人数はさらに少ないことから，結果を解釈し一般化するには限界があると考える。今回の調査では，間接的に調査票を配付する方法を用いたため，配付できる対象者の数が限られた。今後は，調査方法について検討し，調査票の回収率を高めて分析対象数を増やし，さらに分析を重ねる必要がある。

V．結　　論

入院している学童の母親を対象に，子どものケアにおける母親の認識，自立や養育に対する考えとの関係を調査した結果，以下のことが明らかにされた。

① 入院中の学童のケアについて，母親は，できることは子ども自身が行うことを望む傾向にあった。

② 入院中の学童の自立や養育に対する考えにより，母親が認識するケアの実施者に違いが認められた。

これより，子どもの成長を支えるためには，母親と看護師が子どものケアについて話し合い，相互の考えを理解しながら子どもに関わっていくことの大切さが示唆された。

謝　辞

本研究にご協力いただきました入院中の子どものお母様に心より深謝いたします。なお，本研究は，大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

文　　献

1) 片田範子．小児看護辞典　セルフケア．小児看護 1999；22：591.
2) LornaMF．Self-Care concepts and the Care of the Hospitalized Child．Nursing Clinics of North America 1980；15：145-155.
3) 近田敬子．小児看護における家族参加の意味．小児看護　1990；13：649-653.
4) 戈木クレイグヒル滋子．闘いの軌跡．初版　東京：

Presented by Medical*Online

川島書店，1999.
5) 草場ヒフミ，鶴田来美，野間口千香穂，他．子どもの入院に付き添うことについての親の考え．南九州看護研究誌　2004；2：53-58.
6) 村田恵子，片田範子，及川郁子，他．入院時のケアにおける看護婦と母親の役割意識―子どもの年代間の相違―．小児保健研究　1994；53：418-424.
7) 及川郁子，片田範子，筒井真優美，他．入院児のケアに対する親の認識．第23回　日本看護学会抄録集―小児看護―　1992；168-170.
8) 小栗明美，杉田　聡，花田裕子．母親が付き添うことに関する看護婦と母親の思いのズレの検討．第28回日本看護学会抄録集―小児看護―　1997；72-75.
9) 小出扶美子，宮谷　恵，小宮山博美，他．付き添い入院の母親の養育態度と小児看護師から見た母親の養育態度の違いについての検討．聖隷クリストファー大学看護学部紀要　2006；14：83-94.
10) 大日向雅美．母性の研究．初版　東京：川島書店，1988.
11) 谷井淳一，上地安昭．中・高校生の自己評定による親役割診断尺度作成の試み．カウンセリング研究　1993；26：113-122.
12) 幸松美智子．慢性疾患を持つ子どもの母親が行う“意図的な甘やかし”．日本小児看護学会誌　2003；12：57-63.
13) 日本看護科学学会　看護学学術用語検討委員会．看護行為用語分類　看護行為の言語化と用語体系の構築．初版　東京：日本看護協会出版会，2005.
14) 厚生統計協会．国民衛生の動向・厚生の指標．臨時増刊号　2007；54：444.
15) Beneesse 教育開発センター．研究所報47．第3回子育て基本生活調査報告書―小学生・中学生の保護者を対象に―．東京：ベネッセコーポレーション，2008.
16) 舟島なをみ．看護のための人間発達学．3版　東京：医学書院，2005.
17) 宮原　梢，田中小百合，泊　祐子．病気の有無による母親の養育態度―てんかん児を持つ母親との比較―．小児看護　2004；27：369-373.
18) 石山宏央．慢性疾患児の親子関係テスト．心身医学　1993；33：472-479.

〔Summary〕

The purpose of this study was to clarify school-going children's mothers' idea of independence and child care when their children are admitted to hospitals, and to analyze the relation between the idea and perceptions of mothers about the persons taking care of their children. A questionnaire survey was conducted with 93 mothers of school-going children. The result indicated that mothers tend to believe that their children are responsible for taking care of themselves even when they are admitted to hospitals. Further, the mothers' idea of independence and child care when their children were admitted to hospitals affected their perceptions about the persons taking care of their children.

In order for nurses to cooperate with mothers and to help the healthy growth of their children, we feel that it is important that nurses understand mothers' idea of independence and child care when their children are admitted to hospitals.

〔Key words〕

school age, independence, care in hospitals, mothers' perceptions

Presented by Medical*Online